

氏 名	つるた ひろこ 鶴田 洋子
学 位 の 種 類	博士 (文学)
報 告 番 号	乙第337号
学位授与年月日	2018年3月31日
学位授与の要件	学位規則(昭和28年4月1日文部省令第9号) 第4条第2項該当
学 位 論 文 題 目	表現としての引用
審 査 委 員	(主査) 沖森 卓也 (立教大学大学院文学研究科教授) 鈴木 彰 (立教大学大学院文学研究科教授) 山本 真吾 (白百合女子大学文学部教授)

I. 論文の内容の要旨

(1) 論文の構成

序章

第一章 引用のスタイル

- 1-1 『万葉集』『古事記』における引用
- 1-2 『竹取物語』における引用
- 1-3 『土左日記』における引用
- 1-4 『平家物語』における引用
- 1-5 「とて」の消滅
- 1-6 「どうけ百人一首」における引用
- 1-7 引用形式としての「吹き出し」一草双紙における表現を中心にして
- 1-8 庵点から引用符へ
- 1-9 近代小説における引用

第二章 素材としての引用

- 2-1 「いろは短歌」をめぐる
- 2-2 悪意の言語遊戯
- 2-3 「どうけ百人一首」という作品群
- 2-4 黄表紙による不幸の表現—現実をどのように描くのか—

第三章 日本語教育と引用表現

- 3-1 伝聞の「そうだ」
- 3-2 「～とばかりに」「～といわんばかりに」
- 3-3 引用と結びつく「みたいだ」と「ようだ」

終章

参考文献

(2) 論文の内容要旨

本論文は、発言や思考の内容を文の中にどのように取り込んでいくか、一つの作品を次の作品がどのように取り込んでいくかということを中心に、引用表現におけるさまざまな側面を考察するものである。第一章では、時代を追って引用のスタイルがどのように変化していくかを分析し、引用を受ける「とて」の用法を分析し、その消長を明らかにする。さらには、江戸時代における吹き出しを引用形式として分析し、さらに引用符の成立、そして、江戸時代後期から現代に至る「と」の有無、「と」に続く動詞の特徴について分析し、作家の文体との関係を論じる。第二章では、いろは歌を引用し、それを冠にした連句形式の作品や、相手の言葉の一部を引用して言い返す言語遊戯的な表現、そして、百人一首を引用した狂歌、それぞれの特質を論じ、素材としての引用の実際を考察する。第三章では、引用表現の一種である、伝聞の「そうだ」、「～とばかり」、「みたいだ」「ようだ」の意味用法について、日本語教育の立場から、それぞれ様態の「そうだ」、「～といわんばかりに」、比喻の「ようだ」との違いに言及しつつ、その扱い方を提起する。

Ⅱ．論文審査の結果の要旨

(1) 論文の特徴

本論文は、引用形式のさまざまな側面を扱い、その変遷と表現の特質を広い視野から考察するものである。まず、会話や心中思惟の引用表現を、引用形式だけでなく、その後につながる叙述内容との関係にも注目し、文の展開という巨視的な観点から考察を加えている。また、庵点や引用符という引用を明示する符号や、吹き出しの形式など、記号や線による引用の実態とその変遷について、資料に基づいて実証的に分析している。そして、単に先人の説や詩文をそのまま引くというだけでなく、いわば典故として含意する表現技法にも着目し、いろは歌や百人一首を素材とした言語遊戯的な文芸作品の分析を通して、古人の文章を自分の文章の中に取り込むという広義の引用についても論及する。さらに、「そうだ」「みたいだ」といった伝聞の表現も、他人から聞いた文であることから引用文として捉え、他からの情報の引用という言語表現の特質をも究明するなど、引用を総合的に考察したことに大きな特徴がある。

(2) 論文の評価

「引用」を単に、発話・思考の内容を文に埋め込むという形式だけにとどめず、絵の中に吹き出しとして取り込む形式にも言及するとともに、ある作品を他の作品に素材として引用する場合や、比喻表現も一種の引用として認められるという観点など、資料に基づいて広く引用という表現形式を考察した点は独創性に富む。また、狭義での、発話や思考の内容を文に取り込む形式という引用について、「と（とて）」を伴う、もしくは伴わない用法や、引用に先立つ、もしくは引用に続く動詞の表現形式などについて、上代から現代に至るまでの主要な資料に基づいて、その歴史的変遷を明らかにし、「とて」の消長と、その「とて」に繋がる「と」の近代的用法を分析しえた意義は大きい。「とて」は平安時代から現れるが、井原西鶴の作品ごろから衰退に向かうこと、庵点が発話内容を表すようになるのは黄表紙からで、その形態も屋根の形から、直線的な鈎括弧に近い形になるのは『浮世風呂』あたりからであること、吹き出しが現代の漫画のように発話内容となるのは明治初期からであることなどの指摘も意義深い。また、いろは歌を冠とする短歌「いろは短歌」と題する諸本を広く収集し、子女の教育のためのもの、夫婦げんかを扱うもの、その他というように分類し、この作品群の受容の変遷を適確に捉えるなど、素材としての引用が江戸の戯作のあり方と深く関わることを明らかにしたことも価値が高いものと認められる。歴史的変遷の記述の荒さ、考察対象とした文芸作品の偏りなど今後課題も残るものの、引用を広い観点から捉え、文章への取り込み方のさまざまなあり方について、総合的に考察した研究として高く評価される。